

推薦状

第 35 回翁久允賞の贈賞候補者として、これまで立山信仰史研究に携わってきた加藤基樹氏を推薦します。以下に、本推薦の事由を申し述べます。

加藤基樹氏は 2004 年 3 月、大谷大学大学院文学研究科博士後期課程を満期退学。翌年 3 月、博士（文学）授与。2007 年 4 月、同大学文学部歴史学科助教に就任する。2008 年 9 月から、富山県[立山博物館]学芸員として博物館学芸業務に与る。2020 年 4 月より、文化庁文化財第一課民俗文化財調査官に就任して現在に至る。

加藤氏は現在、日本民俗学会、日本宗教民俗学会、越中史壇会等に所属し、専門は近世寺社縁起研究や日本宗教民俗学、日本近世民衆史を中心とする分野に及ぶ。博士論文では「近世薬師信仰史論」をテーマに取り上げるとともに、同時代における近畿地方の寺社縁起や仏教説話、民衆信仰等に焦点を当ててその実態の解明に努めてきた。このたびの同賞選考理由「立山信仰の歴史研究」を踏まえ、以下に関係テーマを数点取り上げてその業績を抄述する。

まず、**三禪定**についてである。立山（越中）、白山（加賀）、富士山（駿河）はいわゆる日本三霊山として崇められ、近世には民衆化して三禪定を果たすことで功德を得ようとした。加藤氏は、三禪定が諸説挙げられる中で巡礼札から室町期に成立していた可能性にも及び、中世立山修験から近世的展開にその視座を求める。また、現段階における分析視角と到達点は、夙に内容分析や檀那場との関係性に見うけられる。しかし、もとより宗教的性格を明らかにする試み自体がなかったことから、方法論としてこれらが今後の課題となることを提起する。三禪定は、他の中世巡礼なども同様に考察されるべきものとしていられる。昨年から報道されているように、富山・石川・静岡三県による三山に纏わる今後の行政上の取り組みとも相俟って、時宜に叶った研究として注視されるであろう。

次いで、立山信仰の布教活動における**立山曼荼羅**の絵解きがある。立山曼荼羅は、果たして何を伝えようとしたかを宗教的機能と思想的背景などから論じる。中でも近世東アジア（主に中朝）における「心学」の世界を特徴的に取り上げるとともに、そこから日本の近世社会、そして立山の「こころ」のあり方に迫り、立山一山として「心学」が救済思想に影響を与えた可能性を想定している。また、「心の善悪」をうつす「鏡」としての機能を子細に分析して、同曼荼羅が単なる教化としての説経画ではなく発心に連なる唱導話としての性格を論じ、信者らに生き方として共感的理解を促した「心を映す鏡」とする。同曼荼羅は先行する各地の宗教絵画などの模倣ではなく、民衆の自律の高まりを得た近世中後期の時代的要請に相対して成立した絵画であったとも結論付ける。

彼岸中日に実施される**布橋灌頂会**も立山信仰を論じる上で重きをなす。加藤氏は、同灌頂会に関する史資料を整理して主に山麓芦峯寺における女人救済のあり方を詳述したが、その背景には宝永年間の岩峯寺との山支配をめぐる争論、加賀藩裁許による立山の山銭徴収権や管理権等の諸権利喪失を想定する。また、同灌頂会の原型を中世に求めるとともに、様々な仏教教義が付随して成熟させたとする従来からの「単線的な発達の解釈」を克服しようとする姿勢も窺うことができる。中でも絵解きの台本『立山手引草』から立山曼荼羅が女人救済の絵画で心に問いかけ、礼拝して即禪定となるものであること、また目

連尊者の母「青堤」の説話、女体蛇身、血の池地獄などにもそうした性格をみる。さらに、同灌頂会の研究史上の問題点も詳細に論じている。

一方、立山開山縁起伝承にみる**矢疵阿弥陀如来**を通して、立山信仰と真宗信仰に通じる生身仏信仰からも捉え直す。同伝承は、平安後期から鎌倉期になる『伊呂波字類抄』から説き起こしているが、加藤氏が中世立山で生成された可能性を見出す隠岐高田神社『高田大明神縁起』に「(佐伯)有頼」や矢疵の熊が阿弥陀に変じる記述の存在を指摘したり、立山諸縁起の記述を詳細に比較して内容的に差異のあることを論じる。そして十悪五逆罪や浄土真宗における生身仏観念、立山が真宗との交渉から醸成された、親鸞を弥陀の化身とする考え方にも及んでいる。さらに、立山衆徒による同如来像を用いた出開帳の様子や立鷹山称念寺と岩嶮寺との争論、「立鷹山金光明院縁起寫」の史料紹介も意欲的である。

上記の研究成果は、加藤氏の研究全体に占める一部でしかないが、翁久允賞選定委員会が定めた審査項目(1)～(5)（平成28年5月28日）に照らすと、次のようになる。まず、(1)「富山から日本・世界への情報発信」・(3)「富山の文化などへの社会貢献」では、研究成果を積極的に公刊するとともに、展示活動等を通して市民的教養の高揚を図り、関連学会や山岳信仰を標榜する各地の関係者等とのネットワーク構築に貢献してきたことを聞く。また、「立山」を通して「真の豊かさ」とは何かという時代の問いに批判的に応え、富山県文化の発信に寄与したことも挙げられる。このことは立山曼荼羅等で既述したごとく、(2)「日本・世界での価値」に通じるとともに、(5)「翁久允賞の価値の向上と、後進への励み」の久允翁の執筆になる立山関係諸論の延長上に位置するものと考えられる。

加藤氏の研究に接するとき、いつも真摯で丁寧な姿勢が通底していることを痛感する。個々にあつては、調査に当たった史資料の翻刻に積極的に努めるとともに、帳冊等のデータ化、数値化を図り研究活動の普遍化を旨としている。また、文献史料と民俗史資料双方からの検証や本質を捉えた用語の厳密な規定にも意を配る。

さらには先学の研究を網羅的に挙げ、立山信仰史と他の宗教史や近世社会の諸相とを有機的に結びつけて考察に及んでいることも言を俟たない。そしてこれら近世期の事象に留まらず、中世社会に遡及する一方、近代との比較検討や今後の展望にも意を尽くしている。こうした学術研究の一方、山岳関係の普及書や情報誌等にも寄稿しているが、その底流に加藤氏の山に対する深い心情も彷彿とさせる。

1991年11月に開館した富山県[立山博物館]は、1972年発足の立山風土記の丘をベースにその後の施設設備の充実に努めるとともに、積年の学芸活動の過程で新たな研究成果が蓄積されて今日に至る。国の重要民俗資料（現重要有形民俗文化財）指定の「立山信仰用具」1083点は、2020年3月に新たに160点が追加され、同文化財の価値と資料群としての活用が高まって上記研究活動に資することが期待される。「立山」は、県民の貴重な共有財産である。加藤氏がこれまで多岐にわたり尽力されてきたことを窺うとともに、既述の調査研究等総じて同賞受章に存分に値するものとして推薦したい。

2023年1月31日

推薦者

元富山県[立山博物館]学芸課長

富山国際大学兼任講師 木本 秀樹